

## 信仰を行動で示す

## ダニエル書 3 章

皆さん、おはようございます。今日のメッセージに入る前に、先週お話しした内容について少し説明させていただきたいと思います。先週は祈りについてお話ししましたが、その中で、父なる神に向けて祈ることについて取り上げました。すると礼拝後、数人の方が私のところに来られました。血のつながった父親との親子関係がうまくいっていないので、父なる神というコンセプトに違和感があるというのです。私もその気持ちはよくわかります。私自身、父親と常に分かり合える関係ではありませんでした。それでぶつかることもしばしばです。そういう人にとって、神を父と捉えるのは確かに難しいでしょう。しかし、この世での人間関係を引きずることなく、天の御父とのつながりを持つことは可能です。父なる神は私たちを無条件で愛してくださいます。神が愛情に満ちた父親だと私たちが思うことを、神は望まれます。この世の父親に対する感情をそのまま神に投影させない術を身につける必要が私たちにはあります。神のありのままの御姿を見ましょう。神をこの世の父と混同してはいけません。簡単なことではありません。けれども、この世の親子関係が影響して、父なる神というコンセプトを受け入れがたいと思っていることに気づいたのであれば、すでに一歩前進です。

では、信仰を行動に移すことについてお話ししたいと思います。ある夜、一軒の家が火事になりました。一家全員が庭に逃げましたが、幼い男の子がいません。男の子は火の手を逃れようと、上階に行きました。父親が屋根に立っている男の子を見つけ、飛び降りるよう促します。「飛び降りなさい。お父さんがちゃんと捕まえてあげるから。」男の子は答えます。「煙と火で何も見えないよ。」父親は言いました。「でも、お父さんが見てるから大丈夫だ。」男の子はついに屋根から飛び降り、父親がしっかりと受け止めました。この男の子が飛び降りたのは、父親が信頼できる存在だったからです。彼は、父親がちゃんと受け止めてくれると信じていました。この幼い男の子は、父親に対する信頼を行動で示しました。クリスチャンの間では、信仰について多くが語られます。今日は、馴染み深い聖書のお話を使って、信仰を行動で示すことについてお話ししたいと思います。私たちも、人生にどんなことが起こっても、神に信仰を置く人になりたいものです。

今日の聖書箇所はダニエル書 3 章です。これは、バビロンに捕囚として連行されたユダヤ人、シャデラク、メシャク、アベデネゴの話です。小さいころから教会に来て、日曜学校に行っていた人なら、この話は何度も聞いたことがあるでしょう。けれども、今日はぜひ初めてこの話を聞くつもりで聞いてみてください。今日のメッセージから、彼らが信仰の人であること、そして結果がどうであれ神を信頼しようという思いであったことを皆さんにわかっていたいただきたいと思います。

## ダニエル書 3 : 1-7

**3:1** ネブカデネザル王は金の像を造った。その高さは六十キュビト、その幅は六キュビトであった。彼はこれをバビロン州のドラの平野に立てた。 **3:2** そして、ネブカデネザル王は人を遣わして、太守、長官、総督、参議官、財務官、司法官、保安官、および諸州のすべての高官を召集し、ネブカデネザル王が立てた像の奉獻式に出席させることにした。 **3:3** そこで太守、長官、総督、参議官、財務官、司法官、保安官、および諸州のすべての高官は、ネブカデネザル王が立てた像の奉獻式に集まり、ネブカデネザル王が立てた像の前に立った。 **3:4** 伝令官は大声で叫んだ。『諸民、諸国、

諸国語の者たちよ。あなたがたにこう命じられている。 3:5 あなたがたが角笛、二管の笛、立琴、三角琴、ハープ、風笛、および、もろもろの楽器の音を聞くときは、ひれ伏して、ネブカデネザル王が立てた金の像を拝め。 3:6 ひれ伏して拝まない者はだれでも、ただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。』 3:7 それで、民がみな、角笛、二管の笛、立琴、三角琴、ハープ、および、もろもろの楽器の音を聞いたとき、諸民、諸国、諸国語の者たちは、ひれ伏して、ネブカデネザル王が立てた金の像を拝んだ。

初めの7節を読みましたが、そこにはネブカデネザル王が大きな金の像を造らせたとありました。これはなんと高さ 27 メートル、幅 2.7 メートルという巨大な像でした。その寸法から考えるとずいぶん細長い像のようですが、幅は実際には奥行だっただろうと推測する学者もいます。これが王の像だったのか、バビロンの神の像だったのか、はっきりしたことはわかっていません。どちらにせよ、王は国のすべての高官を像の奉獻式に召集しました。聖書には、すべての高官が集まり、王の言葉を聞くことになったと語ります。この高官たちの中に、シャデラク、メシャク、アベデネゴがいました。像の奉獻式で、彼らは像の前に立ち、次のような王の勅令を聞きました。音楽が聞こえたら、何をしていても一旦止め、ひれ伏して像を拝まなければならないというものでした。この命令に従わない者には罰が科せられます。命令を無視すれば死刑です。それも、通常の方法ではありません。燃える火の炉に投げ込まれるというのです。奉獻式が終わると、高官たちはそれぞれの地域に帰り、人々にこの勅令を伝えました。こうして、人々は音楽が聞こえるとひれ伏して金の像を拝むようになりました。

信仰について誤解している人たちがいます。今日のメッセージを準備していて見つけたお話を皆さんにも分かち合いたいと思います。この話は、間違った信仰のたとえです。ラリー&ルーシー・パーカーは、自著「私たちは息子を死なせた」の中で、信仰について見当違いをしていたと語ります。ラリー夫妻は、自分たちの信仰さえ強ければ、糖尿病を患う息子を神が癒してくださると信じるようになりました。息子の容体は悪化し、インスリン投与が必要となりました。神が息子を癒してくださると信じた彼らは、インスリン投与を拒否しました。ついに、息子は糖尿病が原因で昏睡に陥りました。ラリーとルーシーに十分な信仰さえあれば、神が息子を癒してくださると彼らに教えた人たちがいたからです。その人たちは、もっともっと信仰を持ちなさいと教えました。残念ながら、息子は亡くなりました。息子の死後も、パーカー夫妻は自分たちの信じる道を突き進みました。息子の葬儀ではなく復活式というものを開き、息子が亡くなって一年経っても、イエスのように息子が死からよみがえるという信念を捨てようとはしませんでした。その結果、ラリーとルーシーはふたりとも傷害致死で実刑判決を受け、刑務所に送られました。彼らは信仰をまったく誤解していました。自分たちがもっと強く信じさえすれば、神が息子を癒してくださると信じていたのです。

では続いて、ダニエル書 3 : 8-30 を読みましょう。

3:8 こういうことがあったその時、あるカルデヤ人たちが進み出て、ユダヤ人たちを訴えた。 3:9 彼らはネブカデネザル王に告げて言った。「王よ。永遠に生きられますように。 3:10 王よ。あなたは、『角笛、二管の笛、立琴、三角琴、ハープ、風笛、および、もろもろの楽器の音を聞く者は、すべてひれ伏して金の像を拝め。 3:11 ひれ伏して拝まない者はだれでも、火の燃える炉の中へ投げ込め』と命令されました。 3:12 ここに、あなたが任命してバビロン州の事務をつかさどらせたユダヤ人シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴがおります。王よ。この者たちはあなたを無視して、あなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝みもいたしません。」 3:13 そこでネブカデネザルは怒りたけり、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴを連れて来いと命じた。それでこの人たちは王の前に連れて来られた。 3:14 ネブカデネザルは彼らに言った。「シャデラク、

メシャク、アベデ・ネゴ。あなたがたは私の神々に仕えず、また私が立てた金の像を拝みもしないというが、ほんとうか。 3:15 もしあなたがたが、角笛、二管の笛、立琴、三角琴、ハープ、風笛、および、もろもろの楽器の音を聞くとときに、ひれ伏して、私が造った像を拝むなら、それでよし。しかし、もし拝まないなら、あなたがたはただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。どの神が、私の手からあなたがたを救い出せよう。」 3:16 シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴはネブカデネザル王に言った。「私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません。 3:17 もし、そうなれば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。 3:18 しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」 3:19 すると、ネブカデネザルは怒りに満ち、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴに対する顔つきが変わった。彼は炉を普通より七倍熱くせよと命じた。 3:20 また彼の軍隊の中の力強い者たちに、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴを縛って、火の燃える炉に投げ込めと命じた。 3:21 そこで、この人たちは、上着や下着やかぶり物の衣服を着たまま縛られて、火の燃える炉の中に投げ込まれた。 3:22 王の命令がきびしく、炉がはなはだ熱かったので、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴを連れて来た者たちは、その火炎に焼き殺された。 3:23 シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの三人は、縛られたままで、火の燃える炉の中に落ち込んだ。 3:24 そのとき、ネブカデネザル王は驚き、急いで立ち上がり、その顧問たちに尋ねて言った。「私たちは三人の者を縛って火の中に投げ込んだのではなかったか。」彼らは王に答えて言った。「王さま。そのとおりでございます。」 3:25 すると王は言った。「だが、私には、火の中をなわを解かれて歩いている四人の者が見える。しかも彼らは何の害も受けていない。第四の者の姿は神々の子のような。」 3:26 それから、ネブカデネザルは火の燃える炉の口に近づいて言った。「シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴ。いと高き神のしもべたち。すぐ出て来なさい。」そこで、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴは火の中から出て来た。 3:27 太守、長官、総督、王の顧問たちが集まり、この人たちを見たが、火は彼らのからだにはききめがなく、その頭の毛も焦げず、上着も以前と変わらず、火のおいもしなかった。 3:28 ネブカデネザルは言った。「ほむべきかな、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神。神は御使いを送って、王の命令にそむき、自分たちのからだを差し出しても、神に信頼し、自分たちの神のほかはどんな神にも仕えず、また拝まないこのしもべたちを救われた。 3:29 それゆえ、私は命令する。諸民、諸国、諸国語の者のうち、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神を侮る者はだれでも、その手足は切り離され、その家をごみの山とさせる。このように救い出すことのできる神は、ほかにないからだ。」 3:30 それから王は、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴをバビロン州で栄えさせた。

3章の残りは、本物の信仰がどういうものを表します。王のもとに行って、ユダヤ人の中に、王の建てた像にひれ伏して拝もうとしない者がいると告げ口した人たちがいました。彼らは、王が出した命令を王に念押ししたほうがよいと思ったのでしょうか。「王さまは、像にひれ伏さない者は炉に投げ込むとおっしゃいませんか」と言いました。なぜ彼らがシャデラク、メシャク、アベデ・ネゴを敵視していたのかわかりません。ユダヤ人の分際で王の高官になるなんて、と腹を立てていたのでしょうか。いずれにせよ、彼らが王の命令に背いていることをわざわざ知らせたのです。これを聞いた王は激怒しました。シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴをすぐに連れて来るよう命じました。怒り狂った王の前に出るなんて、楽しい午後のひとときではありません。王は、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴに事の真偽を確かめます。本人たちに直接確認したかったのでしょうか。王は噂を信じないで、本人たちに尋ねます。「あなたがたは私の像の前でひれ伏すのを拒むのか。」この親切な王は、最後にもう一度、こう警告することで命令に従うチャンスを与えます。「もし従わないなら、あなたがたをすぐさま火の中に投げ込む。」

彼らの返答に注目してください。

### 16-18 節

3:16 シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴはネブカデネザル王に言った。「私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません。 3:17 もし、そうなれば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。 3:18 しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」

3 人は、神が燃える火より偉大で、彼らを火から救ってくださるとは主張しませんでした。神を強く信じているので、神が助けてくださるとも言いませんでした。彼らは、みこころならば神は救うことのできるお方だと確信していました。そして、「神は私たちを救い出すことができます。もしそうしてくださらなくても、私たちはこの神に仕えます」と言いました。つまり、こういうことです。「自分たちがどうなるかわかりません。ただわかっていることは、私たちが神を信頼していることと、これからも神に従うことです。」これを聞いた王はさらに怒りました。聖書には、王は怒りに満ち、3 人に対する顔つきが変わったとあります。きっと王は本心では、シャデラク、メシャク、アベデネゴを助けたかったのでしょう。けれども、彼らの神に対する信仰が揺るがないのを見て、怒ったのでしょう。王は、炉を通常の 7 倍の温度にするよう命じました。つまり、炉をできるかぎり熱くするよう命じたということです。そして、強い者たちに命じて、シャデラク、メシャク、アベデネゴの 3 人を縄で縛り、火の中に投げ込ませました。この火は、超高温に設定されたので、超高温で燃え盛っています。3 人を火に投げ込もうとした強い者たちは、その熱で焼け死んでしまいました。一方、シャデラク、メシャク、アベデネゴはまったく平気です。王が火の中を覗くと、彼らが歩きまわっているではありませんか。王は顧問を呼び寄せ、3 人を火に投げ込んだのに、なぜ 4 人いるのかと言います。王は火に近づき、シャデラク、メシャク、アベデネゴに火から出て来るように命じました。すると、彼らの衣服も焼けていないのを目にします。煙の臭いもしません。王は、彼らの仕える神こそいと高き神であることに気づきました。こうして王はこう言います。

3:28 ネブカデネザルは言った。「ほむべきかな、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神。神は御使いを送って、王の命令にそむき、自分たちのからだを差し出しても、神に信頼し、自分たちの神のほかはどんな神にも仕えず、また拝まないこのしもべたちを救われた。

3 人が命をかけても神を信頼し、従おうとしたことを王は認めました。シャデラク、メシャク、アベデネゴは、神に従い、神に仕えることが何より大事であることを心得ていました。神の掟に背いて他の神々を拝むことで命を守ることは大切なことではないのです。

神をこんなふうに信じたいと思いますか。信仰は、どんな犠牲がともなっても神を信頼することです。そのような信仰を持つには、まず誤った信仰について理解する必要があります。ここで、ふたつの誤解を挙げてみましょう。今からお話する内容は、私が考え出したことではありません。数々の牧師や説教者たちの見解を、今週のメッセージのためにまとめたものです。

1. 信仰とは信仰自体に頼ることではない。つまり、信仰は信仰を信頼することではない。適切な信仰の度合いに達するには、もっともっと信じなければならないと私たちは思いがちです。先ほどお話した夫婦は、もっと信じれば息子が癒されると思いました。息子が癒されないのは、自分たちの信仰が足りないからだと思ったのです。私たちもそんな考えに陥ることがあります。もう少し信仰があったら、もっと信じることができたなら、神が祈りに答えてくださると思うこと

があります。プラス思考でいけば、願ったとおりになると考えたりします。儀式のように祈ったり聖書を読んだりを続け、疑ってはいけないと自分自身に言い聞かせます。そうでなければ信仰が足りないと考えます。これは神への信仰ではありません。むしろ、自分の願いを叶えてもらえるよう神を説得できるほど、私は強く信じているという自信です。もう一度言います。これは重要なので、皆さんにしっかり理解していただきたいのです。これは神への信仰ではありません。むしろ、自分の願いを叶えてもらえるよう神を説得できるほど、私は強く信じているという自信です。先ほどお話しした夫婦は、息子を癒してくださるよう神を説得できると自信を持っていたのです。シャデラク、メシヤク、アベデネゴは、信仰自体を信仰してはいませんでした。彼らは、自分たちの信じる力が神を動かして救ってもらえるなどと、自分たちの信じる力を頼りにはしていませんでした。彼らが信頼していたのは神のみです。だからこそ、火の中でどんなことになったとしても、神はすべてを支配しておられるとすることができたのです。

2. 信仰とは、私たちが願う内容が実現するという確信ではない。皆さんは、信仰自体に信仰を置くような段階は超えておられるでしょうか。ただ神のみに確信を持つべきだとちゃんとわかっておられるかもしれません。しかし、誤った信仰を持つ可能性もあります。私がこうすべきだと思うことを神はしてくださるべきだと思ってしまう可能性もあります。神があることをしてくださるべきだとあなたは思っているでしょうか。その内容は善いことで、霊的なことかもしれません。けれども問題は、そのような考え方や信仰が、あなた自身の意見であって神のみこころに基づいていないという点です。もっと給料の高い新しい就職先を神が与えてくださるとあなたが信じているとします。神がそうしてくだされば、もっと献金ができるからそれは良いことだとあなたは信じます。教会に献金するのが良いことだから、神はあなたにもっと給料の高い仕事を与えてくださって、もっと献金できるようになる、と信じるのです。そうすれば神をたたえることになるから、神はそうすべきだしそうしてくださると考えます。つまり、私たちが神を信じて頼っているのです、神は私たちの思う通りに動いてくださるだろう、という考えです。もう一度言います。私たちが神を信じて頼っているのです、神は私たちの思う通りに動いてくださるだろう、という考えです。この考え方の問題は、神が与えてくださると私たちが信じるから、神から何でも思いどおりの結果を得られると考える点です。

もうひとつお話をお聞きください。ジム・コンウェイは、神と神の愛を信じる牧師です。彼は以前、今私たちが挙げたような信仰を持っていました。自分の求めているものは良いものだから、神からいただけたらと思っています。あるとき、彼の娘がガンと診断され、命を救うには足を切断しなければならぬと医師から言われました。当然ながら、ジムはこれを聞いてがっかりしました。自分の娘にこんなことが起こるのを神がお許しになったという事実を受け入れられなかったのです。また、ジムは神が癒しの神であり、奇跡を起こすことがおできになると信じていました。ジムは心のどこかで、娘が癒されたら神の愛の証として用いられると信じていました。ジムは、神が娘を癒して証として用いてくださる、と家族を説得しました。手術の当日、ジムは娘に足をもう一度だけ確認するよう言いました。神が娘をすでに癒してくださっていて、執刀医が癒しの奇跡に驚いて神の愛を信じるだろうと思っていたのです。医師が娘の足を診察する間、ジムと家族は神の癒しを期待しつつ待ちました。一家は、自分たちが望んでいる事柄に信仰を置いていたのです。待合室に戻ってきた医師の表情から、娘が癒されなかったことをジムは察しました。ジムは待合室を飛び出し、病院の地下で泣きました。壁をこぶしで叩きながら、「なぜ娘を癒してくださらなかったのですか。私は信じていたのに！」と神に叫びました。彼は、一番必要としている時に神から見放されたように感じました。悲しみに暮れながら聖書を開くと、自分の持っていた信仰が聖書の教える信仰でないことに気づきました。彼は、神に自分の思い通りに動いてもらおうとしていたのです。本来あるべき信仰の姿は、神がなさることのすべてにおいて

神を信頼することです。この地上で起こることについて、神がなぜそうなさるのかわからないことがよくあります。けれども、神は私たちが考えるお方ではありません。私たちが考えるのは、この世での人生のことばかりです。一方、神は永遠を視野に物事をお考えになります。神のなさることにいつも納得できるわけではありませんが、神が私たちや家族そして私たちの見知らぬ人にとっての最善を考えておられると信じることができます。神がご存じのことを私たちは知りません。ですから、ただ神が私たちを愛してくださり、私たちにとっての最善を成して下さっていることを信じればよいのです。シャデラク、メシャク、アベデネゴは、思い通りに神に動いていただくという信仰は持っていませんでした。「神様、私たちはあなたに従っています。像を拜んでいないのだから、当然、火から助けてくださるでしょうね」とは言いませんでした。彼らの信仰の対象は、神であり、彼らの望む事柄ではありませんでした。

聖書の教える信仰とは、神のみに対する信頼です。ただそれだけです。何も複雑なことはありません。神だけを信頼することです。今日の聖書箇所から、信仰とは特定の信条を受け入れることのみではないとわかりました。信仰とは、私たちが望む事柄が実現すると信じることはありません。その内容がどれほど良いものであってもです。ヘブル 11 章は、信仰がテーマです。この章で名を挙げられた人々は、神のみに信仰を持っていました。彼らこそ、聖書が教える信仰の模範です。彼らは、神をそのまま神として受け入れました。

#### ヘブル 11 : 8-9

**11:8** 信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかわからないで、出て行きました。**11:9** 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束とともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。

アブラハムは神を信じていました。神は、行く先も知らないで出かけるようにアブラハムに命じられました。イエスも、聖書の教える信仰をお持ちでした。マルコ 14:36 で、イエスは園で祈り、こうおっしゃいました。

またこう言われた。「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うのではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。」

イエスは、死という杯が取り除かれることを願われましたが、その願いに信仰を置いてはおられませんでした。イエスが信じておられたのは神です。そして、神が最善のご計画をお持ちだと確信しておられました。シャデラク、メシャク、アベデネゴも、神が神であられるという事実には納得していました。そして、どんなことが起こっても神を信頼できると確信していました。最後に、お聞きください。神から「いいえ」という答えが返ってくると、信仰が試されます。そういうとき、神が祈りに答えてくださらない、祈りは答えられなかったと感じます。「答えられない祈り」という言い回しはあまり正確でないように思います。神は私たちの言葉のすべてを聞かれます。そして、すべての祈りに答えられます。ただ、その答えが「いいえ」である場合もあるのです。反対に、神から「いいえ」という答えを期待しているのに、「はい」という答えが返ってくる場合もあります。神の答えが私たちの願いと異なったり、自覚しているニーズと違っていたりする場合があることを、私たちは受け入れなければなりません。こういうときに私たちの信仰が試されます。祈りの答えが気に入らない内容であっても、神を信頼しつづけるでしょうか。どんな状況に置かれても、信仰に堅く立つことができるでしょうか。シャデラク、メシャク、ア

ベデネゴとともに、「どんなことがあっても、私は神のみを信じます」と言うことができるでしょうか。では祈りましょう。